運航基準

六口丸海運有限公司

目次

第1章	目的
第2章	運航の可否判断
第3章	船舶の航行

第1章 目的

(目的)

第1条 この基準は、安全管理規程に基づき、児島観光港～本島泊港、多度津港～高見港～本島笠島港～丸亀港、観音寺港～伊吹港～粟島港～宮ノ下港及び瀬戸内海一円(不定期)、西之表港～馬毛島港港路(不定期)、東京湾一円(不定期)、船舶の運航に関する基準を明確にし、もって航海の安全を確保することを目的とする。

第2章 運航の可否判断

(発航の可否判断)

第2条 船長は、発航前に運航の可否判断を行い、発航地港内の気象・海象が次に掲げる条件の一に達していると認めるときは、発航を中止しなければならない。

ただし、第5条に定める狭視界出入港部署配置とし、かつ、港内における基準速力を減じて航行する場合は、視界500mまで発航できるものとする。

気象・海象 地点名	風速	波高	視程	潮位	潮流
児島観光港	10m/s以上	1.0m以上	500m以下	—	—
本島泊港	10m/s以上	1.0m以上	500m以下	—	—
多度津	10m/s以上	1.0m以上	500m以下	—	—
高見	10m/s以上	1.0m以上	500m以下	—	—
本島笠島	10m/s以上	1.0m以上	500m以下	—	—
丸亀	10m/s以上	1.0m以上	500m以下	—	—
観音寺港	10m/s以上	1.0m以上	500m以下		
伊吹港	10m/s以上	1.0m以上	500m以下		
粟島港	10m/s以上	1.0m以上	500m以下		
宮ノ下港	10m/s以上	1.0m以上	500m以下		
小島新田	12m/s以上	1.2m以上	500m以下		
西之表港	12m/s以上	1.2m以上	500m以下		
浦田漁港	12m/s以上	1.2m以上	500m以下		
葉山港(馬毛島)	12m/s以上	1.2m以上	500m以下		

2 船長は、発航前において、航行中に遭遇する気象・海象(視程を除く。)に関する情報を確認し、次に掲げる条件の一に達するおそれがあると認めるときは、発航を中止しなければならない。

旅客船	風速 10m/s 以上	波高 1.5m以上	←児島観光港、本島泊笠島港、多度津港、高見港、丸亀港 観音寺港、伊吹港、粟島港、宮ノ下港
交通船	風速 12m/s 以上	波高 1.5m以上	

3 船長は、発航前において、当該発航港に近接した海域における視程に関する情報を確認し、それぞれ次に掲げる条件に達していることが観測され又は達するおそれがあると認めるときは、発航を中止しなければならない。

発航港	海域及び視程	船種	発航港に近接した海域	視程
	児島観光港	旅客船	この航路の全区間	500m以下
	本島 泊港	旅客船	この航路の全区間	500m以下
	多度津港	旅客船	この航路の全区間	500m以下
	高見港	旅客船	この航路の全区間	500m以下
	本島 笠島港	旅客船	この航路の全区間	500m以下
	丸亀港	旅客船	この航路の全区間	500m以下
	観音寺港	旅客船	この航路の全区間	500m以下
	伊吹港	旅客船	この航路の全区間	500m以下
	粟島港	旅客船	この航路の全区間	500m以下
	宮ノ下港	旅客船	この航路の全区間	500m以下
	小島新田	交通船	この航路の全区間	500m以下
	西之表港	交通船	この航路の全区間	500m以下
	浦田漁港	交通船	この航路の全区間	500m以下
	葉山港(馬毛島)	交通船	この航路の全区間	500m以下

4 船長は3項の規定に基づき発航の中止を決定したときは、旅客の下船、保船措置その他の適切な措置をとらなければならない

(基準航行の可否判断)

第3条 船長は、周囲の気象 海象(視程を含む)に関する情報を確認し、基準航行を継続した場合、船体の動揺等により安全な運航が困難となるおそれがあると認めるとき又は周囲の視程が500m以下となったときは、基準航行を中止し、減速、適宜の変針、反転等の適切な措置をとらなければならない。

(入港の可否判断)

第4条 船長は、入港予定港内の気象・海象に関する情報を確認し、次に掲げる条件の一に達していると認めるときは、入港を中止し、適宜の海域での錨泊、抜港、臨時寄港その他の適切な措置をとらなければならない。

気象・海象 地点名	風 速	波 高	視 程	潮 位	潮 流
児 島 観 光 港	10m/s以上	1.0m 以上	500m以下		
本 島 泊 港	10m/s以上	1.0m 以上	500m以下		
多 度 津	10m/s以上	1.0m 以上	500m以下		
高 見	10m/s以上	1.0m 以上	500m以下		
本 島 笠 島	10m/s以上	1.0m以上	500m以下		
丸 亀	10m/s以上	1.0m以上	500m以下		
観 音 寺 港	10m/s 以上	1.0m 以上	500m 以下		
伊 吹 港	10m/s 以上	1.0m 以上	500m 以下		
粟 島 港	10m/s 以上	1.0m 以上	500m 以下		

宮ノ下港	10m/s 以上	1.0m 以上	500m 以下		
小島新田	12m/s 以上	1.2m 以上	500m 以下		
西之表港	12m/s 以上	1.2m 以上	500m 以下		
浦田漁港	12m/s 以上	1.2m 以上	500m 以下		
葉山港(馬毛島)	12m/s 以上	1.2m 以上	500m 以下		

(運航の可否判断等の記録)

2 運航管理者及び船長は、運航の可否判断、運航中止措置及び協議の内容を航海日誌に記載するものとする。運航中止基準に達した又は達するおそれがあった場合における運航継続の措置については、判断理由を記載すること。短い航路における運航の可否判断については適時まとめて記載してもよい

第3章 船舶の航行

(航海当直配置等)

第5条 船長は、運航管理者と協議して次の配置を定めておくものとする。変更する場合も同様とする。

(ア) 出入港配置

(イ) 通常航海当直配置

(ウ) 狭視界航海当直配置

(エ) 荒天航海当直配置

(オ) 狭水道航行配置

(運航基準図等)

第6条 運航基準図に記載すべき事項は次のとおりとする。

なお、運航管理者は、当該事項のうち必要と認める事項について運航基準図の分図、別表等を作成して運航の参考に資するものとする。

(1) 起点、終点及び寄港地の位置並びにこれら相互間の距離

(2) 航行経路(針路、変針点、基準経路の名称等)

(3) 標準運航時刻(起点、終点及び寄港地の発着時刻並びに主要地点通過時刻)

(4) 船長が甲板上の指揮をとるべき狭水道等の区間

(5) 通航船舶、漁船等により、通常、船舶がふくそうする海域

(6) 船長が運航管理者又は副運航管理者と連絡をとるべき地点

(7) 航行経路付近に存在する浅瀬、岩礁等航行の障害となるものの位置

(8) その他航行の安全を確保するために必要な事項

2 船長は、基準経路、避険線その他必要と認める事項を常用海図に記入して航海の参考に資するものとする。

(基準経路)

第7条 基準経路は、運航基準図に記載のとおりとする。

(速力基準等)

第8条 速力基準は、次表のとおりとする。

船名	ムクジマルホープ	第三むくじ丸	第八むくじ丸	第25むくじ丸	15むくじ	第17むくじ丸
船舶の種類	旅客船	旅客船兼作業船	旅客船兼作業船	旅客船兼作業船	交通船兼警戒船	旅客船兼交通船
船質	軽合金	FRP	FRP	FRP	軽合金	軽合金
進水年月日	平成18年1月	平成3年3月	昭和59年8月	平成10年10月	昭和63年8月	平成11年4月
船舶所有者	六口丸海運(有)	六口丸海運(有)	六口丸海運(有)	六口丸海運(有)	六口丸海運(有)	六口丸海運(有)
総トン数	19トン	19トン	18トン	17トン	17トン	19トン
貨物積載内積	なし	なし	なし	なし	なし	なし
自動車積載面積	なし	なし	なし	なし	なし	なし
旅客定員	74名	85名	50名	35名	12名	(1)旅の場合71人 (2)交の場合12人
主機の種類	ディーゼル	ディーゼル	ディーゼル	ディーゼル	ディーゼル	ディーゼル
連続最大出力	529ps×2	450ps	320ps×2	590ps×2	500ps×2	636ps×2
航海速力	20ノット	14ノット	19ノット	20ノット	17ノット	20ノット

2 船長は、速力基準表を船橋内及び機関室の操作する位置から見易い場所に掲示しなければならない。

3 船長は、旋回性能、惰力等を記載した操縦性能表を船橋に備え付けておかななければならない。

(連絡方法)

第9条 船長と運航管理者、副運航管理者又は運航管理補助者との連絡は、次の方法による。

	区分	連絡先	連絡方法
(1)	通常の場合	本社	携帯電話
(2)	緊急の場合	本社	携帯電話

(機器点検)

第10条 船長は入港着岸(棧)前、棧橋手前150m等入港地の状況に応じ安全な海域において、機関の後進、舵の点検を実施する。一日に何度も入出港を繰り返す場合も同様である。

(記録)

第11条 船長及び運航管理者は、基準航路の変更に関して協議を行った場合は、その内容を航海日誌に記録するものとする。